朝日新聞 2012年(平成24年)4月22日 日曜日

社説 Editorials

2012・4・22

黄砂の季節

国際協力で健康守れ

大陸から黄砂が飛び、春の空をかすませている。暮らしや健康への被害を減らすために、近隣の国で助けあおう。

中国やモンゴルの砂漠で細かな砂が強い風に巻き上げられ、偏西風に乗って海をわたってくる。西日本各地から東北や北海道にもやってくる。

気象庁によると、2000年以降、国内に61カ所ある観測点のいずれかに飛来した日は年間30日を、観測した地点数の合計である延べ日数は300日を超えることが多い。

最も激しかった02年には観測日数が47日、延べ日数は743日にのぼった。

洗濯物や車を汚し、現金自動出入機（ATM）を故障させるような被害が、あちこちでおきる。ひどいときには視界不良で旅客機が欠航になる。

韓国では、精密機械工場で操業停止になったり、街に外出禁止令が出されたりしたこともある。

困るのは、呼吸器などへの健康被害だ。花粉症やぜんそく、アレルギーなどの症状を悪化させるようだ。動物実験などで確認されつつある。

被害を減らすため、福岡市は気象庁の予測をもとに生活面や健康面で注意を呼びかける「黄砂予報」を始めた。

対策をとるために黄砂を科学的に知らなければならないが、わからない部分が多い。

まずは発生源の地域を正確に突きとめ、飛来ルートを割り出すことが必要だ。

1972年に日本と中国が国交を正常化してから、両国は環境分野で政府や民間の協力を積み上げてきた。

日中韓の環境相会議も07年、黄砂の共同研究を始めることに合意した。作業部会が開かれてきたが、中国で予報を担当する気象局が不参加のため、高精度の予報システムをつくるのが難しい。

5月に日中韓の首脳会議が予定されている。日本政府はその機会に、各国の環境省しか参加していない共同研究の枠組みを広げるよう、提案するべきだ。

予報を担当する気象局も加え、生のデータを交換し、共有する体制にするのだ。

中国の内モンゴル自治区を中心に、砂漠を緑にする活動をしている日本沙漠緑化実践協会をはじめ、日本から植林を支援する活動が続いている。

ところが中国ではそれを上まわる年2千平方キロ前後の砂漠化が進んでいるそうだ。

情報の交換とともに、発生源の環境を改善する取り組みもさらに進めたい。

窓 論説委員室から

遠山正瑛記念館

2011 12/6 朝日新聞 夕刊

北に蛇行して流れる黄河に囲まれた中国・内モンゴルのクブチ砂漠。その中にある恩格貝は、日中の砂漠緑化への執念が結実した村だ。

20年前は3世帯5人が住むだけだったが、いまポプラ林が東西16キロ、南北10キロに広がり、3千人が働く。

鳥取大学名誉教授の遠山正瑛さんが2004年に亡くなるまでの最晩年をこの地の植林に捧げた。志を受け継ぐ日本沙漠緑化実践協会の植林ボランティア「緑の協力隊」も延べ1万人を超した。中国政府は砂漠緑化のモデル地区に指定した。

1年前に砂漠に関する科学館が完成した。大規模灌漑で乾燥地を農地に変えるやり方は水資源を枯渇させるとの反省から、水利用の効率化を徹底した緑化をめざすという。メロン栽培や、日照を利用したクロレラの培養などが柱だ。日本人の貢献を紹介する展示もある。

ただ、現実には地下水位の低下は避けられず、緑化と開発のバランスという制約からは逃れがたい。

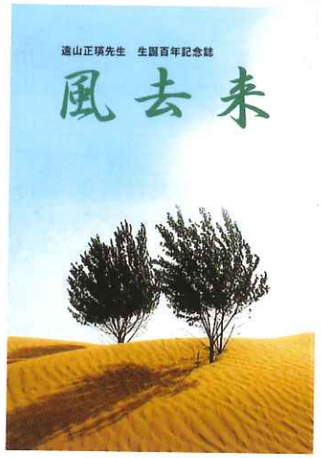
林の一角に遠山さんの遺骨を分けた記念館が立つ。室内は中央の位牌を取り囲むように、協力隊の資料や作業着など身の回りの品が並び、まさに故人の霊を祭る「廟」だ。

発展が急であるほど、大地と人々の心にしっかり根を張る交流も大切になる。そのことを砂漠の真ん中まで来て教えられた。

〈川戸和史〉

事務局だより

「風去来」は、故遠山正瑛初代会長の生誕100年記念として、ちょうど10年前の平成18年２月27日に発行されました。
遠山会長は「21世紀は沙漠の時代」とよくおっしゃっていましたが、その意味合いは人それぞれによって違った解釈ができると思いますが〝心の沙漠〟の中にも水が浸み込んでいくような、そんな「遠山語録」が詰まっています。



★会員拡大のお願い

お知り合いの方がたをお誘い下さい。一人でも多くのお力を大きく結集させて頂けたらと思いますので、ご支援の程、よろしくお願い申し上げます。

個人会員：1口…… 5,000円
団体会員：1口……10,000円
賛助会員：1口……50,000円

〔一般寄付金〕
〔日中友好平和の森〕
〔車輌募金〕
〔私の木・私たちの木〕
郵便振込：00160－5－553452
加入者名：日本沙漠緑化実践協会

★原稿・写真をお寄せください。

原稿は体験談、ご意見など何でも結構です。写真もお送りください。「さばく」の紙面は、皆様のご意見ご希望を幅広く採用し、温暖化が顕著な今こそ、「沙漠を緑に」し、「世界を平和に」する仲間たちとの交歓の場にしたいと思います。どしどしご応募ください。

★取り扱い書籍

品　　名	著　　者	出版社	価格	在庫数	備　　考
風去来（※2015年より値下げ）	日本沙漠緑化実践協会編	三進社	1,000円	多 数	故遠山正瑛「さばく」他掲載の文
夢をつむぐ人々	白鳥正夫	東方出版	1,800円	2	故遠山正瑛が紹介されています
写真集沙漠の木	写真：久保雅督／詩：高橋順子	愛育社	1,300円	12	クブチ沙漠・恩格貝の写真
絵葉書5枚一セット	久保雅督撮影		500円	164	〃

編集後記

《睡眠について》
現在巷の難問題で、寝不足・睡眠不足が問題となっており、何とか睡眠時間を確保したいというのが頭から離れず、床に就いたからと言って睡眠時間が取れているということにはならない。心配である。
ＴＶでこの睡眠という番組を放映した際、覚えておかなければと思い書き留めた中に、睡眠が少ないと頭の脳がスポンジ状態になるとか、認知症が高まる等、怖いことがおき行動に支障をきたす恐れを考えてしまう。眠れないことが重なると体への心配も増加する。この事は睡眠負債となる。借金同様睡眠も不足がたまって返済が滞ると首が回らなくなり、しまいには脳も体も思うようにならない眠りの「自己破産」を引き起こすからだ。
睡眠をお金として考えて欲しい。「一万円お金が足りない」という場合、すぐ解決が出来るし大問題ではない印象だ。
一方負債は「一万円」という場合それはどんどん増えていく印象となる。借金は利子がつくのだから。
つまり「睡眠負債」とは睡眠時間が足りないことによって簡単には解決しない深刻なマイナス要因が積み重なっていくという意味を含んでいる。いってみれば気づかないうちに眠りの借金それは睡眠負債なので自覚しないままに脳と体にダメージを与える危険因子が蓄積されていくとても恐ろしい状態だがあまりに無頓着な多いのが現状だ。これらの睡眠負債に対して自らが学習して正しい睡眠による本人としては正しい生活に戻す方策を整えて行きたいものです。
参考として、サンマーク出版「スタンフォード式最高の睡眠」著者・スタンフォード大学医学部教授・西野精治同大学研究所長￥１６２０を熟読されることを願っています。
（常任理事　山中勝美）

○編集スタッフ
山中勝美　柴崎宣子　佐藤夕姫　坪井公載
山内由希
○印刷　（株）ディグテクノプリント

沙漠を緑に……

さばく

●第 54 号

特定非営利活動法人
日本沙漠緑化実践協会

平成29年（2017年）12月13日発行
発行責任者　藤田佳久
〒101-0021　東京都千代田区外神田5-5-5
沼田ビル2Ｆ
TEL：（03）5812-0389
FAX：（03）5812-0384
郵便振込：00160-5-553452
ホームページ・アドレス　http://www.sabakuryokka.org/
eメール・アドレス　jimukyoku@sabakuryokka.org

●2017年1月より
「中国国内における海外NGO、NPO法人管理法」が施行されました。

「**中華人民共和国海外非政府組織国内活動管理法**」が2017年1月1日より実施されました。この法律は五十四条まであり、「第二章の登録申請と登録」に基づき協会も手続きを行い、無事登録を済ませました。

第一章	総則	(一条～八条)
第二章	登録申請と登録	(九条～十七条)
第三章	活動規範	(十八条～三十二条)
第四章	便宜供与	(三十三条～三十八条)
第五章	監督管理	(三十九条～四十四条)
第六章	法律責任	(四十五条～五十二条)
第七章	附則	(五十三条～五十四条)

登　記　証　書

呼和浩特（フフホト） 公安局にて
登記証書を受け取る
間瀬弘樹中国駐在所長（中央）
と娜仁さん（間瀬さん左側）

ごあいさつ

特定非営利活動法人
日本沙漠緑化実践協会
会長 **藤田　佳久**

皆様、今日は。早いもので、先ほどまで猛暑だ、異常な豪雨だと騒いでいるうちまた1年が終わろうとしています。

それにしても、この1年は前年のイギリスのEU離脱から始まって、個性的なアメリカ大統領の出現と北朝鮮問題などが連鎖的につながり、それに乗るかのように日本でも突然の衆議院の解散、総選挙と、何やら現実とは思えないドラマの展開を見る思いでした、これまでの世界的秩序と思われていたベースが一瞬に転換した記録すべき年になりつつあるのかも知れません。

そんな世界政治のうねりの中で、わが実践協会も試練の年でありました。それは昨年夏あたりから田岡常任理事が早くもその動きをキャッチしていた中国におけるNPO管理法の本年1月からの施行問題でした。田岡常任理事はすばやく中国駐日本国大使館や駐名古屋総領事館に問い合わせ、対応策をとろうとしましたが、それらの中国組織は当時全くその情報を知らなかったようでした。この法の施行はそれほど電撃的で、中国の今日の政治体質のあらわれのように思えました。

しかし、田岡常任理事の予告通り、本年1月から一気に法律は施行され、中国に存在していた8,000もの外国NPOはその対応に大変だったと思います。実際、我が実践協会も大変でした。遠山正瑛会長以来28年間もの中国でのキャリアをもつわが協会は、それなりの独自の組織と運営方法を育ててきたのはご承知の通りですが、その方式を中国側が新たに制定したNPO管理法に適合させなくてはならなくなったからです。ここでも田岡常任理事を中心とした協会スタッフによって適切な対応をすることが出来ました。法案内容を入手し、解読し、どう対応すべきかを検討することになりました。

その結果、新たに承認されるべき多くのフォーマットへの対応が必要であることがわかり、中には日本で証明できないようなフォーマットも含まれ、そのクリア作業は事務局にとっても大変でした。また、日本では不明な事項は現地滞在のナーランさんにお願いし、関係当局と折衝してもらうことも多々あり、ナーランさんには大変お世話になりました。

その過程で、交渉すべき相手は内モンゴル政府の公安当局と林業局が直接的な交渉先である事がわかり、本年4月3日に内モンゴル政府公安局で局長らトップといわばトップ会談へ臨むことになりました。これもナーランさんのお膳立てによるものでした。協会側は会長のほか、田岡常任理事と高橋相談役、通訳は日本側についてはナーランさんが担当してくれました。

公安局長との会談に際しては、これこそわが協会がうまくいかなかったら、他の日本のNPOも全滅になってしまうのではないかと心配し、両肩に日本を背負った感じの久々の緊張感がありました。

公安局との会談風景

しかし、局長は制服姿ながら穏やかな方で、物わかりのよいスマートな方で、お互いの信頼関係を高めることが出来たように思いました。

話し合いの中で、公安からは協会の長年にわたる実績を認め、全面的に今後の緑化活動に協力したいという趣旨で、協会を迎え入れてくれることを伝えられました。好意的に今後の相談にも乗りたいという意向も示され、我々協会側は安心した次第です。これはいわばトップ交渉による原則的な方針の両者による確認を行ったということでしょう、具体的な手続きや問題はフィールドである恩格貝管理委員会との交渉もクリアすることが必要です。ただし、公安局は恩格貝管理委員会よりも優先するという原則秩序も繰り返し伝えてくれました。とはいえ、原則と現実のフィールドの2局に対応していくことにはなるでしょう。

カン公安局長と握手

カン公安局長との話し合い終了後は、恩格貝実業有限公司総経理・王明海氏と久しぶりにお会いし、ナーランさんの妹さんの響きわたる歌声に魅了されました。

そして、翌日、ダラトキで恩格貝管理委員会と2回に分けて実務交渉をしました。公安局の意向が現地まで伝わっていない雰囲気もありましたが、植林計画、間瀬氏の住居、東城氏の件、記念館の整備、他の案件について協議しました。

以上、「ごあいさつ」としては、中国のNPO管理法をめぐり1点だけ現地との交渉の内容まで少し踏み込んでご紹介しましたが、中国のNPO管理法は何とかクリアしたこと、その新たな1年であったという節目の年であったことを知っていただきたく思ったからです。

2年目の年が良い年である事を祈ります。今後とも当協会へのご協力をよろしくお願いし、ともによい地球環境保全に向ってがんばりましょう。

左から
藤田会長、カン公安局長、田岡常任理事、
高橋相談役、通訳のナーランさん

中国政府主催 《砂漠化防止国際会議》開催

日本から当協会田岡常任理事が出席

↑会議場論壇正面

2017年6月12日～17日の6日間にわたって中国政府主催（実施・内蒙古自治区人民政府）『内モンゴル沙漠化防止国際首脳フオーラム』が開催されることになり、日本沙漠緑化実践協会宛にも出席要請の招聘状があったため、田岡常任理事が出席しました。

会議の内容は、

① 沙漠化防止の理論と実践
② 沙漠化防止の先進的な地域の重点調査
③ 沙漠化防止の成功経験と成果検討および未来の砂漠化防止対策
④ 沙漠化防止のための国際交流

などが中心的に議論されました。

テーマが広範囲に渉っているため、会場は首都フフホトから最終地ウーハイまでの沙漠を中心に設定され、沙漠化防止のための技術革新、産業開発、緑化活動などが調査、検証され、多くの課題が提起されるとともに大きな成果も得ることができました。

また、緑化の先進例としてクブチ沙漠恩格貝にも来られ、見学と参加者の記念植樹がされました。

田岡常任理事には、主催者側から事前に恩格貝における植林活動の取り組みについての歴史、成果等についての報告要請があり、ウーハイ会議場で協会の26年間の活動について詳細な報告がされました。

以下は、その時の報告を要旨としてまとめたものです。

7名に栄誉証書が授与された
証書を手に田岡常任理事（写真左）

恩格貝庫布其沙漠における 26年間の植林活動

～日本沙漠緑化実践協会からの報告要旨～

常任理事 **田岡　釈郎**

日本沙漠緑化実践協会は、1991年2月、主として中国・内蒙古自治区庫布其沙漠における沙漠緑化事業に参加するために、日本で設立された特定非営利活動法人である。

設立当初は、日本側：日本沙漠緑化実践協会（遠山正瑛会長）・中国側：伊克昭盟庫布其沙漠綜合開発示範区・東勝カシミヤ実業副経理王明海の三者提携の共同事業として沙漠緑化活動（植林）が開始された。

2011年より上記組織形態は「オルドス市恩格貝生態示範区管理委員会」の指導のもとに置かれることになり、今日に至っている。

日本沙漠緑化実践協会は、日本の元鳥取大学元教授で教鞭をとられ、長年にわたり中国の沙漠緑化研究を続けてこられた遠山正瑛とその志に協力する日本人および中国内蒙古で実業家として活躍しつつも、遠山正瑛の沙漠緑化に対する熱意に賛同した王明海を中心とした中国現地の全面的な協力の下で植林活動を開始した。

もとよりこの事業は、単なる沙漠緑化による生活環境を改善し、民度を向上させ、安定した農牧生活の可能性を求めるものだけではなかった。遠山正瑛は、沙漠緑化を全地球的な問題として人類が直面しなければならない地球環境問題・食糧問題・貧困問題等に挑戦するものとして捉え、その一環としての活動として位置付けていたのである。

この遠山正瑛の呼びかけに対し、日中双方の反応は素早く、日本においては、いち早く植林の実戦部隊である「緑の協力隊」が各地で組織された。その全てはボランティアとしてであり、自身の労働による収入を中国への渡航費と滞在費、苗木代金等にあて、沙漠でスコップを握り黙々とポプラの苗木を植え続けた。

また、中国現地の恩格貝周辺の人々からは、集中植林や日本から来た「緑の協力隊」への便宜の供用などがおこなわれ、また内蒙古自治区人民政府主席より全面的に協力する旨の態度表明がある等、植林事業は友好的に進められた。

1991年沙漠植林を開始以来、2016年までの派遣緑の協力隊員数は12,727名、植林本数は4,066,175本となり、本年もまた継続して緑化作業がおこなわれている。

恩格貝庫布其沙漠における沙漠緑化活動は、日中双方の不断の努力によって一定の前進をもたらすことが証明されたが、今後は気象・地質・水質・水利・樹種・混植の検討・育林・病虫害対策等多数の課題を解決しながら広大な沙漠に挑戦しなければならない。

大切なことは、この挑戦を継続させ一歩一歩築き上げることである。

（2017.6.16内蒙古国際首脳 Forumにて）

参加者記念写真

恩格貝で記念植樹

ウーハイ会場にて
右側、中国科学技術協会副主席の刘恕女史

≪讀賣新聞夕刊（1996年・平成８年６月８日土曜日≫ に掲載された特集記事をそのまま掲載いたします。

21年経った今でも古びない、むしろその当時より更に気候変動が激しく、自然災害もアジアを取り巻く政情も過激になっている今日こそ、必要なエッセンスをくみ取ることが出来る内容だと思います。

事務局　柴﨑

明治人

遠山　正瑛さん

砂漠緑化で戦争なくす

↑讀賣新聞に掲載された特集記事

明治人 …言っておきたいこと

—砂漠緑化で戦争なくす—

鳥取大学名誉教授
遠山 正瑛さん
89歳

「歳（とし）のことを言われるのは、あまり良い気持ちがしないね。まだまだしたいこと、しなければならないことがたくさんあって、もう九十だなんて、安閑としていられない。中国の沙漠の緑化には百年の年月が必要だし、サハラ砂漠はさらに長く千年はかかる。途方もない年月と思うかもしれないけど、私はこう考えてます。１年たてば残りは九十九年、あるいは九百九十九年でしかないと。私も少なくともあと二十年は生きたいね。今のスピードでいくと、あと二十年たてば、今やっている砂漠の緑化の方もかなり行けるという見通しがついている。それまでは何としても頑張らないと」

＜遠くに青い海が広がる鳥取砂丘。砂の上にあぐらをかき、くわえたばこをくゆらせながら語る遠山さん。数えで九十歳になる農学者はいまも現役で、世界の砂漠の緑化に情熱を燃やす＞

「私は世にいう教育者ではありません。『自然に学べ』という恩師、菊池秋雄先生の教えに従い、農場を教育現場として、学生たちとともに汗して農の道を学んできただけのこと。実際、自然は素直に向き合えば多くの事を教えてくれます。私が砂漠緑化の基本姿勢としている〝**自然に素直に向き合う**〟〝**とにかく試してみる**〟の二つは、この菊池先生の教えによるといってもいいでしょう。大学に入学した直後に、先生からまずこうクギをさされましてね『農学を志した以上、休みというものはないものと思え』と。休みがあるのは人間だけで、動物も植物も一日も休みなんてない。休みが欲しいようでは、とても自然界とつきあうことはできない。だから、今日から君は一日も休んではダメだと。今から思えば無茶苦茶な要求だけど、私は即座に『わかりました』と答えて、本当に元旦以外、一日も休みをとらなかった。その習慣がどうもいまだにぬけなくてね（笑い）。でも、菊池先生ご自身も、京都大学の農場長をしておられた十七年間、元旦以外一日も仕事を休まれたことがありません。

……☆……

「自然に学べ・・・」

「私が砂漠の緑化になぜこんなに一生懸命になっているのかというと、今、地球上ではものすごいスピードで、砂漠化が進んでいる。地理学者の話によると、年々四国の半分くらいの面積の土地が砂漠化しており、世界の陸地の四分の一が砂漠で使えないという。これは人間のせいでもあるんだよね。人口が増えると森林の伐採や耕地の拡大が進み、土地は荒廃する。また、砂漠地帯に住む人が増加し、羊やヤギなどの家畜が増えると、草だけでなく木の幹をかじり葉をも食べつくしてしまう。私も中国の砂漠で、せっかく植えたクズやポプラが、一晩のうちに家畜に食べられてしまった苦い経験がある。木を切り倒すのは簡単、

一日でできる。でも新しく植え、育つまでには何年もかかる。それも育ちにくい砂漠で自然に任せていたのでは、砂漠化は進むばかり。それに追いつき、追い越さないと」「現在五十七億の世界の人口は、二十一世紀の半ばには百億になる。その食糧をどうするか。食べ物がなくなると、弱肉強食が生物の本性だから、必ず戦争になる。**私は戦争には反対なので、二度と戦争が起こらないように、砂漠の緑化に命をかけているんです**。現在、地球上では砂漠の国に戦乱が絶えることがない。湾岸戦争しかり、イスラエル、ヨルダン、アフガニスタンしかり。砂漠の民は概して貧しく、貧しいがゆえに民族として団結し、宗教を信じる以外に道はない。この砂漠の民を貧困から救うために農学者である私にできることは、**不毛の砂漠を生産緑地に変えること**。そうすれば、砂漠の戦争の原因の三分の一をなくすことができる。これが私の〝**緑の平和論**〟です」

……☆……

情ある人間育成

「私が中国にこだわるのには、個人的な理由もある。鳥取高等農林学校時代、私は多くの教え子を学徒動員で戦地に送りだした。お国の命令だから彼らはそれを断れないし、私も引き留めることはできなかった。

『では行きます。後の日本を先生、頼みます』と言って出て行った彼らは、今日まだ帰ってきていません。その彼らの魂はおそらく中国大陸のどこかで宙にさまよっているだろう。それを慰めるために、**中国の砂漠を緑化し、地球から戦争をなくすことが、残された私のつとめではないかと**」

「今の若い人に一番言いたいこと、それはね、**苦しみの中に喜びがあり、楽しみがある**んだということ。楽しみの中に楽しみはありゃしない。昔の人は苦労は買ってでもしろとよく言ったもんだけど、本当にその通りだと思うね。自分が苦しみを体験した人間は、人の苦しみや心のいたみがよくわかる。これからの日本は、そういう情のある人間を育てにゃいかんと思うね。今の若い人は、なんか豊かさの実感がないと言うんだね。冗談じゃない。豊かさなんてものは、まだありゃせんか、まだありゃせんかと欲をいえばきりがない。そのうちこんどは没落していく。文明が必ず滅びて行くように」

「口には念仏を唱え、手と足を動かして汗を流し、世のため、＋人のために尽くす。そうすればきっと死んでから極楽浄土に行けると信じています。寝ていて念仏を唱えるだけではダメ。自分の手と足を動かさないとね。お金も生きている間に世のため、人のために使えと言うのが私の持論でね。三途の川を渡るのにお金はいりゃせん。裸で渡れる。遠山語録にこんなのがある。『知恵のある人、知恵を出せ。金のある人、金を出せ。モノのある人、モノを出せ。汗を出す人、汗を出せ。四つが一つにまとまれば、世界の砂漠は緑化する』

人はそれぞれの立場で自分が出来ることを精一杯すればいいということだよ」

……☆…… 以上

→
1992年当時

←
1997年頃

NHK「プロジェクトX」2002年10月放映

≪沙漠緑化事業の更なる発展の為に≫

愛知県
横井　義一
愛知大学ポプラの森
第14次隊

日本沙漠緑化実践協会・常任理事の田岡さんのおかげで、今年の夏、夫婦で恩格貝の沙漠緑化事業に参加する機会に恵まれました。愛知大学が派遣したポプラの森第14次隊に加えていただき、73歳と68歳のいわば萎れ始めた二人の人生が〝緑化〟されたような喜びに浸っています。（二人の感想は、愛知大学発行の「ポプラの森」報告書を参照下さい）

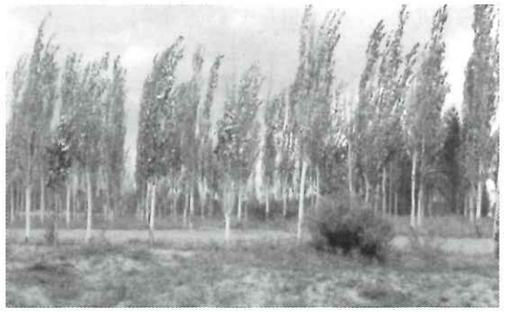
遠山先生の遠大なご意志とその成果には、ただ頭が下がるばかりです。私は恩格貝滞在中、時間を惜しんでホテルの周辺を歩いて見て廻りました。その時に感じた幾つかを書いてみます。

①ホテル食堂前の辻に大きな恩格貝の案内図があります。農業関連産業の発展ぶりや公共施設の充実ぶり等が実に大きく描かれており、この二十数年間の恩格貝の発展ぶりが良くわかりました。

〝遠山先生の記念館はどこかな？〟と探しましたが、なかなか見つかりません。ホテルの位置関係から、この方角にあるはずと目を追ってやっと見つけましたが、他の説明文字に比べ一回り小さく感じられ、しかも道路図の上に後から書き足されたかのように感じられたのです。恩格貝が観光地として注目されるほどになり、訪問客が増えているそうです。

そのような発展を遂げることが出来た原点を、もっとクローズアップして書いてほしかったと、少し淋しい複雑な気分になりました。

②26～27年間の植林事業の成果は言うまでもありません。大きく育ったポプラの隊列が風になびいて、葉がキラキラと輝いている光景を眺めていて感無量になりました。買い求めた絵葉書を見ると、恩格貝賓館の建設時には、ホテル周辺には１本の木もありません。



ポプラの森を風が渡っていく

ホテル玄関前の林を見ていて気付いたのですが、枝が混みすぎ、先が細り、しかも枯れた状態になっています。"間伐や剪定をしなければ木が弱る"と間瀬さんに尋ねてみました。「その通りです。中国側に何回提案しても許可が下りません。伐採は国の方針で禁止されています。」と

の返事でした。一端許したら乱伐が起き、森や林がはげ山になってしまう危険性が危惧され、中国政府のやむを得ない政策なのでしょう。でも、このままほっておいては将来が案じられます。今のうちに解決策を見出す努力の必要性を強く感じました。

日本にも，植林した山の間伐や剪定作業をする為の人手がなく、荒れた状態になってい

るところがあります。しかし日本においては、手入れの大切さははっきりと理解されている問題です。なすべき課題は明白です。次のような点の粘り強い説得が必要と思います。

・手入れした林としてない林の実情を見て考えてもらう機会をつくる交流会の開催。
・現地に研究林を設定して比較研究することにより、現地人の認識が深まるようにする。研究用の実験林ですから、国全体に伐採を許可することにはなりません。

③ホテル正面の階段を下りて右手に進むと、見事に成長したポプラ並木が続き、現地住民の住宅がありました。その途中、青々と茂った並木の中に、数本の木の葉が黄ばんでいるところがありました。ポプラの木の寿命は30数年くらいから始まるそうです。植林事業初期に植えられた地域では、そろそろ、近くに若木を植え替えておく必要があるのかもと推測しています。

朝の散策

③日程の最終日に、以前に植林された地域に入り、むだ枝の剪定作業をしました。
一見して〝剪定作業が追い付いていないな〟と思いました。雷鳴が迫っていて短時間で切り上げざるを得ませんでしたが、居てもたってもおれない心境で、時間を惜しんでぎりぎりまで剪定しました。せっかく根付いても、ムダ枝が多くなり、水不足状態となって枯れる結果になっては何にもなりません。ムダ枝と〝ひこ生え〟の剪定作業の必要性を強く感じて、ホテルへ帰ってから間瀬さんに話したところ、「それに気付いてくれる人が少ないんですよ」と喜んで下さいました。「植えたい！植えたい！」の心境で植林隊に参加する気持ちは私も同じです。植林事業を継続するための新しい隊員の募集は積極的に続けなければなりません。自分や友人の植えた木の成長ぶりの見届けを希望するリピーター隊員も少なくないようですので、剪定を主とする隊の派遣を検討してもよいと思います。その時、枯れてしまった木の植え替えを行えば、〝植えたい〟の欲望も満足できます。趣旨を理解して参加される人も少なくないと思います。毎年でなくてもかまいません。

⑤〝不毛の沙漠に植林をし、緑の大地を蘇えらせる。〟この遠山先生の遠大な偉業について考えていた時、ふと四十数年前のことが頭をかすめました。私は1969年春、小さな中国貿易商社に就職し、いま49年目に入っています。当時は東西冷戦時代で、大陸中国とは政治的には〝戦争状態〟の中国敵視政策がとられていました。当然のことながら、貿易環境は極悪で、会社は瀕死の状態でした。それでも「民間交流を促進して、大陸中国との関係を正常化する力になろう」との気持ちから、粘り強い活動が一部の政治家をはじめ、経済界や文化関係者の間で続けられていました。それが、1971年春のピンポン外交を機に一気に大きなうねりとなり、頭越し外交と日本政府をあわてさせたアメリカのニクソン大統領の電撃的訪中（72年２月）となり、72年９月の日中国交正常化へとつながりました。その後まもなく、「草木もなびく中国詣で」と表現される日中の蜜月時代が訪れました。今年は日中国交正常化45周年になります。

当時の日中の政治関係は、正に不毛の沙漠に例えることが出来ます。その時代に進められていた民間交流は、{沙漠に木を植えよう} と奮い立たれた遠山先生の志に相通ずるものがあると思えた時、胸に迫る思いがしました。蜜月関係は、沙漠に茂ったポプラの林のようです。残念ながら、ここ数年は複雑な日中関係となっています。間伐やムダ枝の剪定により、ポプラの成長を促す環境を整える必要性に類似していると言えます。

この27年間のクブチ沙漠での植林事業の成果は、世界的にも注目されるほどになっています。中国の江沢民元国家主席も、わざわざ遠山先生に面会されて敬意を表されました。日本の中曽根元首相が「恩格貝は日中友好象徴の地」と揮毫された記念碑が現地に建てられているのを見て大変うれしく思いました。

中曽根元首相揮毫の碑↑

こうした実績をさらに積み重ね、日中共同事業の偉大な成果として後世に誇れるものにしていくために、私たちの絶え間ない努力が求められます。

植林事業の円滑な継続には、良好な政治関係の構築がなにより大切です。

政治関係の改善も植林事業の更なる発展も、すべて私たちの手にゆだねられています。

予測される問題を早めに解決し、更なる感動と励みを次世代の若者たちに与えることが出来る成果を作り上げようではありませんか。

≪沙上の足跡≫

愛知県
杉山　美樹
愛知大学ポプラの森
第14次隊

近年、私達の生活はとても快適で便利なものになったが、地球環境が深刻な問題となっています。毎年、日本に住む私達の暮らしの中でも洗濯物や車に降り積もる黄砂。国境を超える環境汚染も地球環境問題の一つです。

好奇心旺盛な私が初めて沙漠緑化活動に参加したのは20歳代の頃でした。友人から沙漠緑化活動の話を聞き、心魅かれた私は仕事を退職しクブチ沙漠へ。北京駅から寝台列車で包頭へ・・・どこまでも続くひまわり畑、通り過ぎる雄大な山々、そして車窓から眺める地平線まで続く大草原での御来光。どの景色も壮観でした。

壮大なクブチ沙漠の景色

道中、黄河に架かる浮橋を歩き、小舟で漁をする家族に出会いました。その渡し船のような小さな船で寝食を共にする現実を知り私は驚きました。このような水上生活を営んでいる一家族たちがいる。かわいい幼い子供達がいて経済的には豊かとはいえないが、子供達の表情は明るく「豊かさ」とは何かということを改めて深く考えさせられました。

その後、恩格貝のホテルへ向かう沙漠の砂路ではバスのタイヤが動かなくなり、暑い中バスを降り、みんなが一丸となって一生懸命バスを押す。ちょっとしたハプニングもあり、

何とか無事に辿り着き現地の方々から歓迎を受けました。

私の初めての植林はスコップを生れてはじめて握ることから始まった（苦笑）。手作業による植林活動に悪戦苦闘！しかし、思いのほか楽しく一生懸命に作業を進めていくと充実感に満ち溢れた。そして、ポプラの木漏れ日の中での休息のひと時。沙漠の景色を眺めながら一気に飲み干すビールは最高だった。

また、このような働きだけでなく現地の方々と触れ合い木を植えることにより、沙漠の緑化とそこに住んでいる人々の支援にも繋がるということを学び、知りました。

その後、30歳代となった私に、ある日小学生だった甥が「地球環境のため、何か僕にできることがあるのだろうか。」

その一言が、甥と一緒に沙漠緑化活動への一歩を踏み出すきっかけでした。「百聞は一見にしかず」様々な経験が、彼の心に何か大きく残るものがあるのではないだろうか。そう思案した私は久しぶりのクブチ沙漠へ。美しい風紋、砂丘が続く沙漠の風景、夜は大地に大の字に寝ながら見上げる輝く星空。神秘的な沙漠の景色が「お帰りなさい」と私を待っていてくれました。

隣で二人仲良くスコップを握る。自分の身長よりも大きな穴を掘り、スコップいっぱいの砂をすくい上げる甥。悪戦苦闘する姿が目に映ります。昔の私を思いだし思わず苦笑。無邪気な彼が穴を覗き込む度に落ちそうになり、隣でヒヤヒヤ。休憩時には沙漠の住人であるトカゲを追いかけ、沙漠の大地を駆け巡る。

小学生の刀雅と一緒に

沙漠緑化活動の中で彼は、水やエネルギーなど限られた資源で暮らす人々と接し、初めて日本の豊かさを感じそして、再び沙漠緑化

中学生へと成長した刀雅

活動に参加したいと中学生へと大きく成長した甥に強く誘われ、私は仕事を退職し40歳となった今年の夏、クブチ沙漠へ。白酒で乾杯！クブチ沙漠で呑む白酒は格別である。白酒を片手におしゃべりをして過ごす楽しく素敵なひと時。歳月が流れ、恩格貝のホテルの周りの砂利道は綺麗に舗装されアスファルトの地面に覆われていた。シャワーも24時間浴びることが出来るようになっていた。幼い頃訪れた恩格貝の風景の記憶から大きく様変わりした町の様子や人々の生活に彼は驚いていた。

また、植林活動の楽しさや達成感、様々な経験により多くの事を学び、感じることが出来た。彼にとって「自分の経験はどんなに小さくても百万の他人の経験より値打ちのある財産である」旅となったことでしょう。

長い時を経て恩格貝を訪れた私は移り行くクブチ沙漠の姿を目にする貴重な体験をすることができました。沙漠化が進行した土地より「緑豊かな地球」を未来へ遺すため私達に何かできることはないだろうか。
それはとても難しいものでありますが、遠山先生の志が受け継がれ、このような活動が続けられていくことではないでしょうか。

そして、子供達を取り巻く現状。２０歳代の頃、訪れた万里の長城。そこで日本では見ることのない現実に私は出会いました。物売りや物乞いする子供がおり、彼らは路上生活をする戸籍の無い子供達でした。
テレビで見たことのある子供達の光景を目の前で実際に見てその環境や現実を知り、愕然とした。

今回の旅の中で、万里の長城へ訪れる機会に恵まれました。以前の光景とは違い、物売りも少なくなっていました。疑問を抱いた私に現地の方が「一人っ子政策」の廃止により、第一子でないことなどから戸籍を持てなかった子供達・・・無戸籍の子供達が減ったこと。しかし、無戸籍者は少なくなったが今もいることを話してくれました。

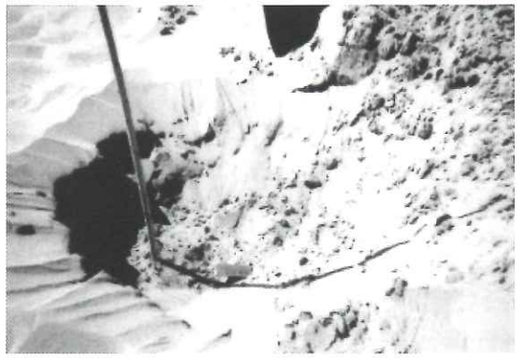
世界中で当たり前の生活ができない人々がいる。深刻な問題が多く残されています。

沙漠緑化活動では植林活動だけでなく、多くのことを学ばせていただきました。

我が家の庭先の春、ライラックの花に誘われ揚羽蝶が舞う。夏、蝉が鳴き夏の訪れを教えてくれます。幼いころは蛍が美しく舞い、川ではモロコが泳ぐ豊かな自然の中で育ち、畑ではたくさんの時間と愛情をかけて大切に育てられた野菜や果物、ピーナッツの収穫、秋にはさつま芋堀りなどを楽しみ四季折々の季節を感じながら暮らしてきました。

しかし、急速に開発が進み今ではたくさんの家や工場が建ち、多くの自然が減少しています。

私は環境保護の取り込みや対策などにより、いつまでも生命豊かな緑溢れる大地が続いていって欲しいと思います。



今年の夏、植林したポプラの苗木

≪沙漠緑化活動を通じて感じたこと≫

愛知県
杉山　刀雅
愛知大学ポプラの森
第14次隊

ボランティアとはなんだろう？
僕にもできるのかな？

そんな疑問から緊張と不安な気持ちで小学生の夏休みに初めて沙漠緑化活動へ参加しました。僕が体験したボランティアは中国の内蒙古自治区恩格貝のクブチ沙漠に植林をするという活動でした。そこでは、水やエネルギーなど限られた資源で生活する人達が暮らしていました。その生活を見て僕は「日本は豊かだ。」と感じたことが心に強く残っていました。その後、植林した木々は緑の葉をつけ大きく成長しているのだろうか？

人々の暮らしは豊かになったのだろうか？このように思った僕は中学生となった今年の夏休みにクブチ沙漠へ植林をするため再度、砂漠緑化活動に参加してみました。

久しぶりの植林活動ではスコップ１本で深い穴を掘り、その中へとポプラの苗木が倒れないように真っすぐ立てて植えていきます。沙漠の沙は表面はサラサラしています。しかし、掘り続けると今度は固い地層となり掘っても掘ってもなかなか進みません。暑さの中、手作業で穴を掘るのにはとても苦労しました。ポプラの苗木を植えると次はまた、スコップ１本で穴を埋め戻し、ポプラの周りの水が溜まりやすいように土を盛り水鉢を作ります。汗をいっぱいかきながらの作業。次第に時間が経つのを忘れるくらい熱中していた僕は無我夢中で１本、２本と多くの木を植えていました。とても暑くて大変だったけれど達成感がとても大きく、なによりも楽しかったです。

前回、植えたポプラの苗木は現地スタッフの方々により大きくポプラの森へと成長していました。そして、緑豊かな土地へとなった今では人々の集まる豊かな大地へと変わりました。

360度見渡す限り砂丘や沙漠が広がり、見

上げると美しく青く澄んだ空、おいしい空気、そして夜空に輝くたくさんの星。自然の大きさをいっぱい感じることができました。

日本ではいつもみんなが時間に追われる忙しい日々を送っています。ボランティア活動をすることによって体も丈夫になり心も元気になります。どんなボランティア活動でも良いので１人でも多くの人達が色々なボランティア活動に参加する社会になってほしいです。

また、中国ではとても暑い日が続いたが下痢や熱、腹痛になる人達がいるので水や、かき氷を食べないように！と注意をされました。僕はのどが渇いたらミネラルウォーターを飲むようにしていました。水を飲んで下痢や腹痛になるなんて日本の生活では考えられないことです。毎日のどが渇くと水道の蛇口からきれいな水がでる衛生的で便利な生活。いつも安心して水を飲めるなんてどんなに幸せなことなんだろうと思いました。

世界にはまだまだ僕の知らない出来事が多くあります。その中の一つでも多くの現実を知り、自分自身にできることを探してみたいと思います。そのためにも、明日から今、僕ができることを精一杯頑張っていこうと思います。

∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞

2017年　恩格貝での
ボランティアありがとうございました。

大阪府　東城憲治さん
広島市　田辺美穂子さん
上海市　李　亜芬さん

2018年のボランティア希望の方、事務局までお申し出ください。
植林現地恩格貝及び
事務局でのお手伝い

訃 報

★会員 早川良平さん（享年91歳 岐阜県）
2017年１月16日永眠

美濃加茂市立古井（こび）小学校の生徒たちに呼びかけ、空き缶を集め「平和の森」創生植林活動に尽力されました。

茲に謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

≪おすすめの本≫

中央公論新社から出版されている、司馬遼太郎『十六の話』の中のひとつ「**樹木と人**」についての紹介です。これは1986年５月、大阪吹田市で開催された「国際グリーンフォーラム・都市と緑の文化戦略」における記念講演に加筆したものです。

31年前のお話しですが、自然破壊についての歴史的考察や、地球表面の地質的格差の話、等々今に通じる良いヒント満載です。
一部抜粋しました。

『ひとたびモンゴル高原に鍬を入れますと、その年はまだよろしいのです。ついでパラパラの土になります。そこへ太陽がいりつける、フライパンで熱したような土になる。そしてその土は有名な季節風にのって、北九州から大阪付近にまで飛び散ってしまう。そして岩ができただけならいいのですけれども、真夏の熱い砂が連鎖反応を起こして、北京付近の土壌まで熱くしてしまうのです。北京付近の黄土層も、これを乾燥させきって吹き飛ばしてしまう。

大騒ぎしても、もう二度と草原は復活しません。いかに大きな技術があろうとも、もはや草原だけは人工的に復活することはできない。樹木は植えることができますが、草原は復活することはできないのです。』

『1980年代になって、ようやく、われわれは地球の緑をすべて守らなければいけない、切ったら必ず植えなければいけない、そして生態系を変えるような切り方をしてはいけない、というように日本人全部が思い始めたのではないでしょうか。日本の歴史の中で、このような思想が根付いたのは初めてのことです。』

最後に『緑は、すべての基礎です。』と結ばれています。

（文責　山内由希）

≪日中友好平和の森≫ に寄せて…

「沙漠に思いを馳せて」

千葉県
石井　惠雄
倫理第65次隊

1）　故遠山正瑛初代会長の生誕百年記念事業である「日中友好平和の森」創生プロジェクトに参画して以来十余年を費やし、本年三月に当初の目標であった、石井一族の森として、八孫の森、八子の森他二十区画の植栽が完遂し、一息ついたところであるが、何せ相手は物言わぬ生き物である。苗木は植えて置けば勝手に育つと云う事は、絶対に無いのであり、むしろ植栽後の方が手間ひまがかかるので、本当の森造りは今後の手入れ次第である。

何せ植栽地は最悪の条件地の沙漠のど真ん中である。依って今後は補植、枝打ち、剪定、砂止め、水遣り等々これ等を怠ると決して「森」にはならないのである。

初期に植えた苗木もその保証期限も一部終了し、今後は自らの手を下さねばならない大作業が待ち構えているのであり、真の出番はこれからと心得て、この沙漠とは生有る限りの付き合いとなる。

「八孫の森」看板

2）　私が、この沙漠に傾注するようになった経緯を少し述べてみたい。

私は十代の終りの頃より山登りに取憑かれていた。その頃東京都山岳連盟傘下の都内でも精鋭的な山岳会が昭和二十九年十一月号に新人募集の広告が「岳人」「山と渓谷」の二誌に掲載され、十八才より二十三才迄男子のみの案内が在り、これに応募、翌年正月を過ぎて間もなく二月四日に指定の会場へ来場あれとの通知を受け胸躍らせて出席、其の席で八名が入会を許されたのである。

後で聞くところ、三十八名の応募があったそうで、これは相当に厳しい世界に飛び込んでしまったのかなと多少の後悔もあったが、以来二十年近くその組織に在籍、十七回に及ぶ冬山を体験し青春を謳歌、この間二度の大怪我、そして復帰、四十才を前に会員としての「三代義務」も果たせなくなり、遂にOB勧告を受け第一線を退く事となる。（尤もこれは人並みに結婚も出来、子供４人も出来た事にも因るが）。

3）　平成10年ごろと記憶するが、我が千葉県に於いて、東京湾の最深部に位置する市川、船橋両市に跨る三番瀬と称される広大な湿原がある。又ここは東京湾の浄化槽とも云われ、渡り鳥の休息地としても貴重な湿原である。

湿原を千葉県は埋め立て、道路、鉄道、住宅等の計画が持ち上がり、賛成、反対と、県政が市民、県民を巻き込み、真二つの政争となり、そこへ知事選が絡まり泥沼状態。

当然のことながら自然派を自称する我は、埋め立て反対の女性知事候補を支援。そして見事女性知事誕生、埋め立ては見送られ、以来二期を勤められ、現在は県民、市民の憩いの場として昔に変わらぬ美しい状景を提供してくれているのである。

3）　私の所属する松戸市倫理法人会の倫友が平成17年の緑化に参加。更に家庭倫理の女性会員も参加。「石井さんが行ったら必ず沙漠に嵌るわよ」と煽る始末。よし！この眼で確かめようと翌18年の倫理緑化第38次隊に、家内と共に初参加。

沙丘ウォッチング

4） 聞きしに勝る沙漠の壮観さ。更に夜空の星の見事さに魅了される。又沙漠の砂に埋もれる農家を訪問、「数年前迄は25戸の部落であったがこの数年砂の浸蝕が激しく他の仲間はみな逃げ出し、残ったたった一軒の我が家も此処ではもう生きて行けない」との話に、砂の押し寄せる凄まじさに驚かされる。

この砂を喰いとめるのは、遠山正瑛先生の提唱する植林によるグリーンベルト以外に無いと痛感させられる。又先生はこうも説いておられた。「砂止めが出来れば沙漠は世界最大の食糧生産地になる」云々。

以上述べましたが、植栽は決して楽で楽しいことではない。むしろ植栽後のアフターフォローが苦しく大切であると想う。

現在我々が生活している地球上のあらゆるところでの荒廃を見るとき、これ等を喰い止める事へ、少しでもいいから手を差し出そう！

今年６月
倫理65次隊に
参加の筆者

≪「私たちの木」に寄せて≫

京都府
辻井　麻杞
（本名　武子）

今年も４月３日に、満開の桜の木の前で「親子三人の写真」を撮りました。

海軍兵曹長だった父・谷 太市郎（生存なら102歳）の写真を真ん中に、母・谷 美津代（96歳）、娘・辻井武子（麻杞・75歳）です。

私達・父と娘は、実際に顔を合わせた事がありません。父は、フィリピン・ミンダナオ島モロ湾ザンボアンガ沖にて、敵機の雷撃を受けて、第２京丸が沈没の際、戦死しました。昭和19年８月７日でした。娘の私は２歳７か月でした。

《お父ちゃん！私達親子３人の名前で、「私たちの木」を恩格貝に植えてもらいましたよ！》

植えてもらった苗木ポプラの札を付けた名

「継続の原動力は責任感」

福岡県
宮崎　吉裕
（NPO法人九州田主丸町緑の応援団 団長）

最初に沙漠緑化に参加して26年が経過しました。私自身18回目の参加でした。永く続けることは本当に大変なことです。体力のおとろえ、経済的負担、日程の調整等、私自身のクリアすべきことは勿論、組織を維持して運営していくことも大変な苦労があります。継続は力なりといいますが、その原動力は「責任感」だと思います。組織に責任を持つ、活動に責任を持つことの大事さをつくづく感じます。

26年の継続は大きな成果と評価をいただくようになりました。昨年は、中国大使館程永華大使より表彰を受けました。本年は中国駐福岡総領事館より中学生派遣費用に対して多大な御支援をいただきました。紙面を通じて、お礼申し上げます。このような成果と評価は私たちの責任感が、さらに増したと考えるべきだと感じています。

今回の植林は、沙漠の両面を体験することができました。植樹１日目は大変暑く、参加者の中には、靴のゴムが暑さの為、溶け始め、とうとう自分ではいでしまわないと作業できない状態でした。ちなみにその靴のメーカーはあの世界的に有名なナイキでした。私は地下足袋をはいていましたが、例年より暑さを感じていました。

２日目からは朝から雨がシトシト降り作業を止め、沙漠科学館の見学などに当てましたが、日本ではカッパを着て作業するぐらいの雨量でした。過去の経験で、沙漠で雨に合うと落雷の危険があります。隠れる所がなく、スコップを使う作業は危険だと判断したからです。雨は午前中にやみ残り150本を植えるため作業再開しましたが、前日とはうってかわって。肌寒く感じる程でした。考えてみますと緯度は北海道・青森と同じ位であり、標高1100メートルの場所です。青森の山頂で雨が降ったと思えば納得いく体験でした。２日間で500本のポプラを植えることができ、さらに、一昨年植えた木の剪定作業もすることができました。皆さんの規律ある行動に感謝いたします。

沙漠の民（金さん）宅へ民家訪問、天安門広場、故宮博物館、胡同散策、王府井散策でサソリを食べたこと、万里の長城等一定の感動をもって帰国されたと思います。

ただ、人間の感動は時間の経過と共に消滅していく性質を持っています。極力思い出していただきたいと思います。一番良いのは再度参加することです。これも責任感なのです。

緑の応援団一同お待ちしております。

-沙漠植樹第22次九州田主丸隊報告集より-

「緑の応援団に参加して」

福岡県
井上　陽太
第22次九州田主丸隊

僕は、中学校に入り初めての夏休みに、祖父に誘われ、モンゴルへ植林活動に参加することにしました。僕はモンゴルや砂漠に関して、暑くて緑がないなどあまり良いイメージを持っていなかったので迷いました。そこで今回の活動に参加して、本当にそうなのか自分の目で確かめてこようと思い参加することを決めました。

沙漠に着くと、まず緑があることに驚きました。沙漠に生えている草は、動物から食べられないためのトゲや臭いがあり独自の進化を遂げていました。またトカゲなどの生き物もいて、沙漠には何もないだろうという予想をくつがえされました。

植林活動では、一日目は現地の学生と一緒に活動し、休憩時間に交流をして親交を深めました。

現地中学生と共に植林し汗を流した。

二日目からは緑の応援団だけでの植林活動です。一本を植えるのにスコップ一本と拳二つ分の深さの穴を掘るのですが、掘ると同時に乾いた砂が落ちてくるので砂を何度も繰り返しかき出さなければ無いませんでした。何とか掘ることができると湿った砂があるので、そこにポプラの苗木を植える作業を続け、一人で二十七本を植えることができました。きつかったけど、植え終わった後には日常では感じることがない達成感を味わうことができました。今年の参加者で五百本を植えましたが、これまでの活動で三百万本以上を植えたそうです。これまでに植えたポプラは、水のない沙漠でも大きく育っていました。僕の祖父は何度かこの活動に参加していたので、育った木を見て安心した表情を浮かべていました。

民家訪問

この活動の中で民家を訪問しましたが、植林により野菜などの実りが増えて感謝していると聞き、この活動に参加した喜びを感じました。

中国における生活や日本への影響を考えると、今後もこの活動を続けていかなければならないと考えています。

-沙漠植樹第22次九州田主丸隊報告集より-

「植林活動を終えて」

福岡県
久野　博
第22次九州田主丸隊

500本の植林達成、お疲れ様でした。18名のチームワークが目標達成の原動力となりました。また、ツアー全般でも目標達成だったと思います。

ツアーを満足するには、３つの要素があると考えます。

１つ目は、皆が健康で事故にも遭わなかったことです。

２つ目は、天候に恵まれたことです。沙漠ではめずらしく午前中、雨となりましたが、その他は観光地を含め晴れとなりました。

３つ目は、旅行行程が予定通り消化できたことです。初日北京着が２時間半遅れましたが、所定のレストランで食事が出来てその後も順調でした。

中学生の日中共同植林は今回で４回目となります。今年は、これまでの共同植林のなかでは一番打ち解けて積極的に会話をしたり、友好関係が築かれたように感じました。午後の交流会でも質問が途切れることなく出され、互いの国のことが少しでも理解できたのではないかと思います。次世代の子供たちにとってはいい体験であり、これからも交流会を推し進めたいと思います。

私は十数回連続で参加していますが、恩格貝の変貌に危惧を覚えます。緑が増えて森を形成していますが、一方で観光地化がここ数年で加速度的に進んでいます。

日本からの植林団を見てみますと、十数年前など多い年で50団体以上恩格貝に訪れていましたが、昨年は14団体と激減しています。政治問題などで日本人が中国を敬遠している、すなわち嫌いになっている。このままでしたら、日本沙漠緑化実践協会の組織も危ぶまれ、駐在員の間瀬さんにも影響がでるかもしれません。過去この土地は日本人が植林して森を形成した土地だったという過去形が現実にならないようにしないといけない。

政治的にはゴタゴタしていても、市民活動や交流など草の根運動で植林を続けていかなければいけない。私達参加者が広告塔となり、植林の大切さや意義を機会あるごとに発信をし「継続は力なり」の言葉通り続けることが大切だと考えます。

昨年の14団体が少しでも多くなりますよう願って、「九州田主丸隊」は連続で来年も行きます。

-沙漠植樹第22次九州田主丸隊報告集より-

握手する日中両国の中学生

←
若者に植林への思いを伝える間瀬弘樹駐在所長（手前の背中）

→
恩格貝旗へ各自願いを込めて書き込む

≪第13次緑の協力隊に参加して≫

静岡県
久津輪 早苗
三島緑の会第13次緑の協力隊

8月22日静岡富士山空港から上海へ。上海は一泊のみ、翌23日、9時25分発の便で上海から内モンゴル自治区の包頭空港へ。約3時間の飛行なので、上海から静岡へ帰る位の距離か。

到着してバスで高速道路を約1.5時間走ってやっと目指す恩格貝の假日酒店（宿泊先）に着いた。さすがに昨日から飛行機とバスの移動のみだったので疲れたが、今回の協力隊のメンバーは、年配の方が多く、66歳の私はあまり疲れた表情も出せない。

ホテルのロビーでは、内モンゴルの風習に則って、42度の酒で天と地の神様への感謝の祈りを一人一人が捧げた。ホテルでの注意事項ではドアが開けにくいかもとか、トイレットペーパーは絶対に流さないで屑籠に投下すること、又、水道水は飲まないこと等日本でも勉強していたことが現実として知らされた。いよいよモンゴル体験だと、うれしさ半分身構え半分の自分が居た。

当日はホテル前の遠山先生墓前への参拝や砂漠散策をしたが、雲が多く夜の星を見られそうになく、砂漠に寝転んでの星空ツアーは無かった。ただ、夜の歓迎会が終わってから、ホテルから歩いて照明の無い暗い路上から見た夜空は、昼間の雲がすべて無くなり満天の星空であった。人工衛星がすごいスピードで通過していくのを眺めながら、目が暗闇に慣れるにつれ、宇宙の奥までも見えるくらい奥深い星空を見ることができた。日本から遠く離れたモンゴルの地に来たんだと実感できた時間であった。

明けて、24日は午前中、砂漠の緑化作業である。山梨の富士吉田から来られた協力隊約20名を含め、バスで砂漠の境界地へ乗り込んだ。約3mピッチに、ポプラの苗木をスコップで1.2m位堀り下げた穴に植え込む作業である。「今日は200本を植えましょう」とのかけ声と共に、全員が汗みどろで取り組んだ。

砂漠は掘れども掘れども、砂が崩れてきて、大変だぞと耳にしていたが、実は3日前に雨が降ってくれており地表から30m以下は湿っており、砂地が適当に固くなっており大した苦労も無かった。現地に駐在している日本人の方が休憩タイムをうまく取ってくれ、全員休み休み作業をすることができ、目標の200本はみるみる内に達成できた。とは言え、バスに帰る沙漠の道は、足下を掬われる様で、やはり体は疲れているのだなと感じた次第である。

ホテルで昼食をとり、午後からは、松の苗木を100本植える作業であった。こちらは、冬の風で倒れない様に2段堀して植え込んだが、皆さん元気で女性達も賑やかに作業を進めていた。富士吉田隊の7歳の女の子が、最後まで元気に走り回りながらお手伝いをしている姿は微笑ましく元気づけられた。予定通りに植栽を終え、ホテルに帰りシャワーを浴びて、ベッドに寝転んだときの脱力感と満足感はここでしか味わえない感覚であろう。

夜の食事では、モンゴルのガイドの男性が喉の奥から声を震わせながら唄う駿馬を称えるお祝いの歌を披露してくれ、モンゴルの地を実感した。

翌25日は内モンゴル自治区の首都呼和浩特市の空港へ。約3.5時間のバス移動であった。高速道路を延々と走りながら周囲の広大な農場（どこが境かわからないくらい広い！）に驚き、他方は、道路から数百メートルも離れると、砂漠がどこまでも続いている光景がそれこそどこまでもどこまでも続いている。これこそが中国大陸の広大さである。呼和浩特空港から上海へ3時間。バスと飛行機の移動で今日一日が終了。翌26日は蘇州へ行き、27日は又上海へ戻り28日に上海から静岡へ帰ってきた。

移動の長い旅行であったが、内モンゴル地区の農場の広大さ、都市の建設ラッシュ、そして古きを残す蘇州や活力あふれる近代化された2400万人都市の上海をちょっと見てきたが、中国人は人口の多さから考えても、ここ5年から10年で大きく変わっていくのであろうとつくづく思う次第である。地球環境を守る対策の一つである砂漠の緑地化作業は地道ではあるが、まずは我々一人一人が、取り組まなければ後世に住みよい地球環境を残せないのだと改めて感じた。今回の作業で、植えたポプラが、そして松が成長してくれている姿を次回見る機会があることを願って、今回の活動を振り返っている今日この頃である。

三島緑の会設立15周年記念感想文集より

≪第13次緑の協力隊に参加して≫

静岡県
瀬川　光治
三島緑の会第13次緑の協力隊

振り返ってみたら、私が前回、緑の協力隊に参加したのは、2012年の第9次隊（8月20日～26日）でした。今回の参加は5年ぶりで、本当に久しぶりの参加でした。

私は、初めて富士山静岡空港を利用させていただきました。8月22日富士山静岡空港から社bb杯浦東国際空港経由で恩格貝に。途中上海で一泊、実に2日かけての恩格貝までの長い旅でした。包頭空港では今回同行する他の隊の方々が待っていました。

中には知っている方もいました。バスに揺られ車窓からの景色を見ていて、大分景色も変わってきているなと思いました。

発展？変化？が　凄まじい速さで過ぎていく国です。

恩格貝に到着し、賓館のロビーにで間瀬さんからの歓迎式典に臨み、これも懐かしい「天の神・・・・」と白酒を飲み干す。

初めて参加する人たちは、モンゴル衣装に着飾った女性から、盃を受け取り、所作を教えてもらいながら「天の神・・・・」と男性によるモンゴルの歌が披露されている中、30名の参加者が、一人ひとりこの行事に参加し、うっとりとしていました。無事、歓迎式典も終わりました。間瀬さんの沙漠講義、故遠山正瑛先生の法要を大正寺の住職さんが執り行い無事に一日が終わりました。

24日午前中は、今回の目的の植樹です。バスに乗って、植樹場所近くまで出かけていき、植樹場所まで沙漠の中を、「ポプラの苗木」「スコップ」を、みんなで担いで、砂に足を取られながら息も切らせながら進み、やっとの思いで到着いたしました。初めての方もいるので、間瀬さんから植樹方法の説明を受けた後、30名の隊員が一斉に植樹に取り掛かりました。スタッフの方がすでに植樹場所には、小枝で目印をしてあり、その場所にスコップの長さプラスこぶしひとつを目安に掘り進みました。

掘り終り、ポプラの苗を植えた後、周りに水がたまるように土手を苗の周りに作って完成です。今回は前日雨が降ったので砂が濡れていて掘りやすかったです。スムーズに進み、200本のポプラの苗木を植える事が出来ました。

植樹場所から見渡した風景は、遠くを見れば沙漠が果てしなく続いていましたが、私達緑の協力隊が植樹した足元は、確かに緑に覆われ始めています。一歩一歩、ポプラの木をこれからも植えていきたいと思います。

私の役目は緑の会が募集した「私の木」の写真撮影です。岩達さんと一緒に、ポプラの苗木に名札を付け、それぞれ写真撮影をしていくのです。風が吹き、名札の向きが変わってしまったり、ピントが合わなかったり、カメラマンの腕が悪いのでしょうか。写真撮影は順調とはいきませんでした。が、やっとの思いで撮影を済ませました。日本に帰ってから記念写真作成の作業が待っています。

↓苗木を１本１本撮影する筆者

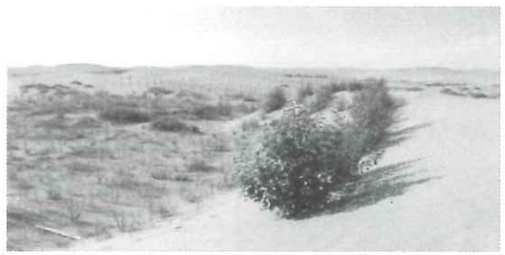
24日午後からは新しい作業が一つありました。トウモロコシ畑の横の道に、松の木の植樹でした。私の背丈以上に育った松の木100本を30名の隊員と一緒に植樹しました。重く運ぶのが大変で、掘る穴も大きく、沙漠とは違い、植樹場所の土地が硬めだったので掘る作業が大変でした。これで24日の作業は無事に終わりました。

↑トウモロコシ畑の横で
松を植え終え、記念のショット

25日は恩格貝からバス移動で呼和浩特に、飛行機で上海へ、26日は留園、虎丘、寒山寺を巡り、楽しかった蘇州観光。

27日は豫園、外灘、運河観光、夜は上海雑技団見学と楽しい上海観光の時間が過ぎていきました。28日は上海浦東国際空港から富士山静岡空港へ、富士山が見えた時は日本に無事に帰ってきたんだなあと思いました。

隊員のみなさま、いろいろありがとうございました。



【ヒト・ひと・人・広場】

≪間瀬弘樹さんと田辺美穂子さんご結婚≫

間瀬弘樹中国駐在所長と、田辺美穂子さんが、昨年12月４日（日）遠山正瑛初代会長の墓前（山梨県富士吉田市大正寺）にて結婚の誓いをご報告しました。

↑手を合わせて愛を誓うご両人

↑ご両人のとびっきりの笑顔に
大正寺ご住職･遠山正尊さまは緊張気味？

←
故遠山正瑛会長の
揮毫､「夢通恩格貝」
の石碑前にて

この日は天も祝福か？故遠山会長のお墓からは
↓富士山が望めた。

「再　見」

……やれば出来る　運命のゴビ沙漠
人生を変えた一本のポプラ……

会員の星美恵子さんと加藤キミ子さん（二人で150歳コンビ）の植林活動における話が本になりました。

遠山正瑛先生と出会い、日本沙漠緑化実践協会での活動を通じて、中国内モンゴル自治区で暮らす現地の方々との交流、植林活動のことなど・・・。沙漠緑化の意義を後世に引き継ぎ繋いでいけたらと思い本を作られました。本ご希望の方は協会に在庫がございますのでお申し出ください。

（文責：柴崎宣子）

【恩格貝で「你好・再見」】

2013年３月25日、協会宛に、１通のメールが届きました。アメリカミシガン大学へ留学しているヤン・ヨンさんという方からです。ヤンさんが子供の頃、恩格貝で日本人ボランティアの梅おばさんと会い、梅おばさんも小学生の子供さんを連れてきていて、一緒に遊んだ。日本の物もいろいろ貰った。ついてはその人の住所を知りたいので教えて欲しい由、書かれていました。

梅おばさん？誰かしら？と思いを巡らし、そうだ！きっと星恵美子さんではないかと電話をしてみましたところ、そんなことがあったなあと遠くに思いを馳せつつ写真を探し出してくれました。「この子ですよ」と。→

そしてあくる年の2014年７月にヤンさんが来日。星恵美子さん、お嬢さんの紀美子さんと10何年ぶりかの再会を果たしたのでした。

右からヤンさん、星恵美子さん、紀美子さん

そしてまだまだ続きがあるんですよ。

今年2017年５月、紀美子さんが恩格貝で結婚式を挙げました。その際、ヤンさんとお母様も出席くださり旧交を温めました。

（文責　柴﨑宣子）

モンゴル衣装の紀美子さんと花婿さん

↓左星恵美子さん、花婿の右側紀美子さんの姉上一番右娜仁さん

↓花婿の右、ヤンさんの和服姿

↓左からヤンさんの母上、加藤キミ子さん、ヤンさん

～星恵美子さんからのメッセージ～

「恩格貝の変わり様はすばらしく、以前協力隊に参加し、緑化に尽力された方々、ぜひとも恩格貝を再訪してみませんか。いつでもお供致しますよ。」

平成29年度（2017年）活動報告

3月 1日（水）　**●理事・役員会及び総会 開催**

3月 2日（木）～5日（土）　**●藤田会長、田岡常任理事、高橋相談役 訪中**
今年1月1日より、中国国内海外NPO法人管理法の申請手続き及び恩格貝新植林地の件で、达●特旗政府内恩格貝管理委員会との打ち合わせの為。

3月 31日（金）～4月1日（土）　**●東北復興サクラ植林**
今年も昨年と同じ仙台市亘理町に於いて、総勢40人で、三島桜等50本を植樹。何年後かには、この一帯が桜山の名所となることを願いつつ一本一本植えていきました。

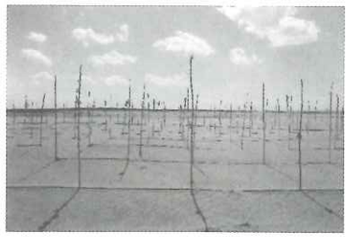
まず笹竹の根っこを掘り出す

苗木の植付け作業

4月下旬　**●間瀬弘樹中国駐在所長　恩格貝入り**
●恩格貝地域　「平和の森」「私の木」集中植林
ポプラ他8,772本植樹

4月下旬　**●バヤンノール地域**　「日中緑化交流基金」助成金事業
ポプラ及びザグ　17万6千本植樹

→今年植えたポプラ



→昨年植えたポプラ

→３年目のポプラ

→３年目のザグ

4月下旬　●**シリンホト市**　「国土緑化推進機構・緑の募金」助成金事業
フィサンダクー沙地にポプラ他潅木類1万8千本

4月下旬植林作業風景と看板

7月芽吹いたポプラと灌水作業

4月～10月　●**「緑の協力隊」派遣**　14隊240名　3,947本植樹

6月12日～17日　●**世界沙漠会議が**内モンゴル自治区烏海(うーはい)市にて開かれ、日本代表(1名)として王明海氏より当協会に話があり、田岡釟郎常任理事が出席。

8月10日　●**インターンシップ受け入れ　大学生5人**
9月12日　●**インターンシップ受け入れ　大学生4人**
※昨年に引き続き今年も「気づく/伝える」をテーマに、高橋仁相談役と会員の鈴木健氏に対応していただきました。

9月中旬　●**恩格貝「西川チエーンの森」植樹**
ポプラ＆棗　5,000本
10月11日　●**間瀬弘樹中国駐在所長帰国**

9月30日(土)～　●**グローバルフェスタ JAPAN2017(お台場)に出展**
10月 1日(日)

10月25日(水)　●**盛岡市立下橋中学校2年生の訪問学習**
応対：会員の鈴木健さん、事務局柴﨑宣子

11月下旬～12月　●**「さばく」54号 発行及び発送　3,000部前後**

平成30年度（2018年）活動計画

★ 1月下旬～2月中旬	理事会及び総会
★ 3月29日～30日	「東北復興桜植林」宮城県山元町
★ 3月下旬	間瀬弘樹所長　恩格貝入り
★ 4月上旬～中旬	※恩格貝　「平和の森」「私の木」集中植林
	※シリンホト市「国土緑化推進機構助成金事業」
	潅木類34,000本　障子松3,000本
★ 4月上旬～10月	「緑の協力隊」派遣
	15隊 300名 植林本数5,000本 予定
★ 10月中旬	間瀬弘樹駐在所長帰国
6日(土) 7日(日)	グローバルフェスタ JAPAN2018(お台場)に出展
下旬	盛岡市立下橋中学校協会訪問学習
★12月上旬	「沙漠」55号発行及び発送　3,000部前後

2018年　東北復興“桜植林”いざ東北へ！！

【伊達家ゆかりの輪王寺で名園散策】　　担当：高橋　仁

ツアー名	旅行期間	人数
東北復興“桜植林”いざ東北へ！！	3/29(木)～3/30(金)　1泊2日	30人

集合			
3月29日（木）	東京駅集合の方	東京駅発 仙台駅着	09:40 やまびこ45号にご乗車下さい 11:33
	仙台集合の方	11:30	仙台駅 新幹線 中央改札口前

	行程	食事
3月29日（木）	⊙11:45　仙台駅新幹線中央改札口前出発→バスで昼食会場へ（山元町田園）	朝×
	→植林地で桜の苗木の植樹→イチゴ狩り→秋保温泉へ（17:30）→	昼○
	※お世話役：メモリアルテラシマ　　寺島さんTEL 0223-37-0627	夜○
	※秋保温泉ニュー水戸屋　TEL 022-398-2301　FAX　022-398-2242	
3月30日（金）	9:00ホテル出発　　→輪王寺へ、お庭を散策（すぐ隣の資福寺もどうぞ）→杜の市場へ	朝○
	買い物及び昼食（昼食代は各自ご負担願います）→　仙台駅 15:00解散予定	昼×
	東京方面お帰りの方、仙台駅発15:46（やまびこ146号）→17:56 東京駅着	夜×

旅行代金　2万5千円　仙台駅集合・解散の費用です。
（仙台駅までの費用と二日目30日の昼食代は各自ご負担お願いします。）
内容が変更になる場合があります。詳細は後日ご参加者に送付いたします。

お申込み・お問い合わせ　日本沙漠緑化実践協会事務局
TEL 03-5812-0389　FAX 03-5812-0384
E-mail　jimukyoku@sabakuryokka.org
アジア・エコツアー・ネットワーク㈱　高橋　仁　携帯電話　090-1428-9605

2017年（平成29年）　緑の協力隊実施一覧表

緑の協力隊	参加人数			植林	
隊名	男	女	合計	本数	備考
東日本大震災復興桜植林	17	22	39	50	仙台市亘理町で三島桜他
地球倫理の森第64次青年緑化隊	21	23	44	500	中国大学生連合70名合同
地球倫理の森第65次緑化隊	21	7	28	1186	地球倫理の森烏蘭布和第5次隊
第19次王子製紙緑の協力隊	14	4	18	360	
地球倫理の森第66次緑化隊	14	7	21	500	地球倫理の森烏蘭布和第6次隊
第218次緑の協力隊　※	・	・	・	・	中止
第12次東村山緑の協力隊　※	・	・	・	・	中止
愛知大学ポプラの森第14次隊	17	11	28	443	内蒙古大学学生10名合同
九州田主丸緑の応援団第22次隊	14	4	18	500	ダラト旗中学生10名合同
アミダ富士北山麓大正寺発41次隊	5	6	11	400	各隊合同緑化作業
三島緑の会第12次隊	9	1	10	↑	アミダ隊に合流
奄美大島隊創成	3	0	3	↑	アミダ隊に合流
鳥取市緑の協力隊	3	1	4	↑	アミダ隊に合流
第219次緑の協力隊　※	・	・	・	・	中止
内蒙古鹿王特別隊	5	2	7	8	記念植樹
第220次緑の協力隊　※	・	・	・	・	中止
アミダ富士北麓大正寺発第42次隊	4	0	4	214	
エジナ・カラホト遺跡保護緑化隊	3	2	5		10/20～阿拉善盟額済納旗
合計	150	90	240	4,161	

2017年度「緑の協力隊」14隊　参加者　240名　植林総本数　4,161本

第13期 「平和の森」お申込み・植林実施一覧表

（2016年9月20日～2017年11月30日）　　敬称略

お名前	森の名称	口数	お申込み本数	実施本数	次年度植林本数
石井惠雄	石井フミエの森(19)	10	1,800	1,800	0
石井惠雄	石井惠雄の森(20)	10	1,800	200	1,600
石丸博英	石丸ファミリーの森	10	1,800	1,000	800
小川満	小川満・金蘭の森	1	180	0	180
(株)メカニック	(株)メカニック設立30周年記念	1	180	180	0
西川産業(株)	西川チエーンの森	38	6,840	0	6,840

今年度は中国のNPO管理法の関係で作業開始が遅くなり、植林の適期との兼ね合いでお申込みの本数全部を植林することが、できませんでした。2018年度春に繰り越して植林をさせていただきます。

平成29年度 「私の木・私たちの木」お申込み

お申し込み期間（2016年5月24日～2017年11月30日）　　敬称略

県名	お名前	口数	名札名
岩手県	佐原茂樹	1	佐原茂樹
	佐原裕朗	1	佐原裕朗
茨城県	波田野愛	1	波多野毅
			波多野トリー
			波多野愛
			平井綾佳
			平井奏音
埼玉県	渡邊彌	1	渡邊彌
	山崎欽三	1	山崎欽三
千葉県	小川敬子	1	小川敬子
	田上明日香	1	田上明日香
東京都	中島哲夫	1	中島哲夫
	山崎修	2	山崎修
	松宮喜久	10	小次郎
	戸田敏博	1	戸田敏博
	申貞華	1	申貞華
	林延子	1	林延子
			関たかみ
			中村裕子
神奈川県	杉中千恵	1	杉中千恵
			杉中健志
			杉中智祐
			杉中千華
			関根ひろ子
	池田晃	1	池田明美
			池田圭太
			池田あかね
			池田琴音
			池田駿太郎
	宮脇正	1	宮脇正
	森井アキ子	1	森井アキ子
	森井園子	1	森井園子
	日野久美子	1	日野久美子
静岡県	福石忠	1	福石忠
	大野吉之助	1	大野吉之助
	三島市立坂小学校	1	秋山あゆみ
		1	伊藤涼香
		1	岩佐大樹
		1	甲斐聖那
		1	甲斐稜麻
		1	金子麗羅
		1	志村菜々美
		1	杉村優宇
		1	鈴木拓磨
		1	芹澤柚月
		1	高橋咲季
		1	竹下愛助
		1	本間花蓮
		1	宮澤織
		1	鷲山比奈乃
		1	川村啓介
	山本理代	1	山本蒼大　山本大貴
	東海税理士会三島支部	1	東海税理士会三島支部
	岩達譲	1	寺園陽琉
	石垣玲子	1	石垣メイのパパ
		1	石垣メイのママ
	小永井康一	1	小永井康一

県名	お名前	口数	名札名
山梨県	宮原知子	1	小林章宏
			宮原海
			重野陽子
			宮原知子
			宮原文隆
		1	重野隆志
			曽根美紀
			曽根晃彦
			曽根剛志
			曽根舞花
岐阜県	木村君子	1	木村君子
愛知県	戸松やえ	1	戸松やえ
	野々垣幹男	1	野々垣幹男
		1	野々垣吉徳
	高文軍	1	高文軍
			周先民
			董紅俊
			李香善
			Rumme　paul　lee
		1	蔡毅
			王暁葵
			王岩
			曹志偉
			陳晏
		1	鳥居裕介
			鳥居小百合
			趙有亮
			趙肖男
			鳥居晴
		1	王莉莎
			王小涵
			王達強
			牧野恭一
			郭小蕙
	北川恵子	1	北川恵子
	日比五郎	1	日比五郎
	染木知夫	1	染木知夫
	光岡鏡子	1	光岡鏡子
三重県	伊世利子	2	あした葉
	ウォーデル美代子	1	川喜田善之助
滋賀県	小林幸夫	1	小林幸夫
	南部寿子	1	南部寿子
大阪府	島崎卓泰	1	島崎卓泰
			馬場博文
			馬場由美
			馬場翔大
			馬場音羽
京都府	辻井武子	1	谷太市郎
			谷美津代
			辻井武子
	和田三男	1	和田三男
兵庫県	真島太郎	1	温暖化防止を！
	真島由美	2	Yumi. M
	王少峰	2	王小峰・王笑音
	前田知明	4	前田知明
香川県	田代寿起	1	田代寿起
鹿児島県	東峯行弘	1	東峯行弘

以上のお申し込みの植林作業は、完了いたしました。

● 新規会員名簿　敬称略　（期間2016年12月20日～2017年11月30日）

宮城県　(株)鈴電
山形県　ジャストクリーン(有)
栃木県　大山結実恵
千葉県　田上明日香
埼玉県　大竹壽子
東京都　東村山市日中友好協会
神奈川県　原　磨里
山梨県　平松　智
石川勝行
村山順弥
篠原泰
愛知県　藤井喜平　伊藤久美子　林敬子
高文軍　協和交易株式会社
静岡県　大野吉之助　豊岡武士　小島清子
滋賀県　冨増和彦
三重県　中西学　二宮恵美子
福岡県　角喜久男　中野君子
大分県　小田　徹
鹿児島県　久野　博

● ご寄付者ご芳名　敬称略　（期間2016年12月20日～2017年11月30日）

北海道　石川博晶
岩手県　金﨑征子　小原英
及川千鶴子　菊池スマ子
盛岡市立下橋中学校
宮城県　恒賀敏晴
福島県　小原　幸
栃木県　大山結実恵　(株)新日本石匠鷹嘴信明
群馬県　広田誠四郎
茨城県　莎日娜
千葉県　鈴江　章　上野原昭一
谷川悌子
埼玉県　渡邊　彌　山﨑欽三
内田富美子
東京都　土木正美　桑原律子
戸田敏博　林延子
岡田　実　星　陽一
高津和子　清水敏明
神奈川県　照山幸子　川久保篤
福田隆義　中瀬晃江
澤田茂友　矢澤直子
満尾邦輝　杉浦　卓
山梨県　篠原　誠　大正寺
静岡県　福石　忠　山村　誠
小川正三　鈴木喜久夫
岩達　譲
愛知県　堀田和秀　日比五郎
伊藤久美子　野間順一
匿名希望　小野真理子
周藤　實　野々垣幹男
内藤衣里　毛利彰宏
石川佳弥子　三井順子
山内恭子　小早川紀伊子
協和交易株式会社(横井義一)
岐阜県　木村君子
滋賀県　塚本美智子　冨増和彦
村田　淑
京都府　青山とうこ　辻井麻杞
大阪府　森美紀子
兵庫県　石丸博英　前田知明
白川利明
岡山県　高原達也
広島県　今木義和
鳥取県　竹内美津子
福岡県　西森壽喜　高山和幸
中尾義宣　稲益勝喜
佐賀県　佐賀市家庭倫理の会
熊本県　松本　直
鹿児島県　久野　博
九州沖縄クブチ沙漠サミットinかごしま
安田壮平

● 未使用使用済切手・ハガキ　使用済インクカートリッジ他　ご寄付者名　敬称略

（期間2016年12月20日～2017年11月30日）

北海道　窪田美津子
岩手県　菅原洋子　金﨑征子
富澤基子
福島県　佐藤甫子　安斎克仁
新潟県　飯島隆衛
埼玉県　新井茂男
千葉県　鈴木健
静岡県　大沼倶夫　石田仁美
三島市立坂小学校緑の少年団
山田幸一　富士宮市青色申告会
三島市緑の会　小島善明
静岡県　永野川税理士事務所
東海税理士会三島支部
合同会社ふじ・さくらWorks
熱海伊東青色申告会
加納覺　松井努
瀬川光治　岩達譲
社労士法人田方労務事務所
愛知県　毛利彰宏　池田芳昭
大阪府　島崎卓泰
兵庫県　大久保昌子
福岡県　井上孝　井上颯太